

平成22年度 佐賀市立神野小学校 学校評価総括表

1 学校教育目標		心豊かに 生き生きと 学びを創る 子どもの育成	
2 学校経営ビジョン			
◇めざす学校像……………	○「わかる・かかわる・活動する学校…	・楽しく充実感に満ちた学校(生活) ・創意ある生き生きとした学校(学び) ・地域とともに歩む学校(特色)	
◇めざす子ども像……………	○「逞しく生き抜く力」を備えた子ども	・五つの光「健・心・知・行・和」を求め、調和のとれた子ども	
◇めざす教職員像……………	○「高きに和して協働」する教職員	・教育愛に満ち実践力のある教師 ・研修に励み、専門性を求め続ける教師 ・児童、保護者、地域社会の近來と期待に応える教師	
3 本年度の重点目標		4 前年度の成果と課題	
(1) 心の教育を推進し、郷土を誇りに思う心情と高い規範意識・倫理観に支えられた実践力のある豊かな人間性を育む。【心・行・和】 (2) 個に応じた指導方法の工夫改善に努め、確かな基礎学力の定着をめざす。【知】 (3) 食に関する指導や体力作り等の健康教育を推進し、生涯にわたって強靱な身体と強い意志「やりぬく力」の素地を培う。【健】		○学校経営方針の目標達成に向け、評価育成システムの目標及び方策の中に、各自の校務分掌と学校経営方針目標との関連を意識した目標作成を行い、その達成に向け計画的かつ積極的に取り組むことができた。 ○家庭学習の充実に向け、低学年からの学習への習慣づけや基礎・基本の定着を目指し、各学年の家庭学習のあり方や取り組み状況の情報交換等を行い、学校全体で共通理解を図る。 ○学び方の習得に向け、算数科における問題解決学習を通じ、児童の「考える力」「表現力」の育成を図る。特に、聞く・話す力については、お互いの考えを高め合うような相互作用を促す学習活動をととして、自分の考えに自信を持って言うことができる児童の育成を図る。	

5 計画表							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	評価及びその理由 A-十分達成、B-ほぼ達成、C-やや不十分、D-達成できず	評価担当者	具体的方策	成果と課題(◎成果 ▲課題ないしは今後の方向性)
学校運営	○学校経営方針	本年度の重点目標の周知	・教職員、児童、保護者に周知させる。 ・方針、内容についての保護者の理解及び認知度を90%以上にする。	A ・保護者の評価において、97.3%がわかりやすく伝えているという評価を受けており、昨年度と比べも、2.4ポイント向上しており、目標を十分達成できた。また評議員からも学校だより等において方針などわかりやすく伝えられているという評価を受けた。	校長 教頭	・教職員には職員会議で、児童には全校集会等で説明する。 ・保護者へは各担任からの学級経営案で、校長はPTA総会で取組の説明や地域の会議等に参加した際説明するなど、方針等の理解の向上に努める。	◎全校集会等において、今年度の「神野小学校マニフェスト」やその月の重点目標等を機会あることに話し指導を行った。それに伴い児童会が中心となり、あいさつ運動に取り組むなど学校全体で、心の教育活動の気運を高めることができた。 ◎学校の方針等はホームページで発信したり、学校だより等で積極的に知らせるなどして理解を得られるよう努めた。 ▲教職員が今年度の重点目標をしっかりと自分のものとして理解し、その具現化に向かって一丸となって全職員で取り組んでいく。
	○教職員の資質向上	学級経営に資する指導力向上	・小中連携活動を校内研究に位置づけ、「円滑な移行」「授業改善」の大前提である生徒指導と、それを支える地域・家庭との連携を土台に、教科指導において、『習得』『活用』『探求』を連動させ、「思考力」を育て高めることを目指す。今年度も算数科を中心に授業研究を進め、教師の指導力向上を目指す。	A ・校内研究主題のもと、算数科、特別支援教育において、講師を招聘し、理論に裏付けされた実践的授業研究を行うことができた。学校評価では、保護者から95%、職員から97%の肯定的評価を得ることができた。	主幹○ 馬渡 西村	・9年間の学びをつなぐという意識のもと、低・中・高学年毎に研究の内容や方法を設定して研究授業を行い、実践レベルでの検証を通して、研究内容の理解と深化を図る。	◎小中連携における「円滑な移行」と「授業改善」を目指して、各学年部会を中心に研究を推進し、年4回の全校授業研究会が実施され、指導法の工夫を追究することができた。 ▲研究主題の具現化のために、全員授業を前提として、問題解決力を高めるとともに、児童の「言語化」と「活用力」の更なる育成を図りたい。
	○危機管理体制	・事象発生における報告、連絡、相談、対応の体制づくり ・不審者と児童の問題行動への対応も視野に入れた校外・校内組織づくり	・事象の発生に際し、速やかに連絡・報告・相談ができる体制をつくる。 (風水害、火災、不審者対応避難訓練) ・事象の発生に的確な対応の仕方について確認する。(不審者対応) ・実践的な訓練を実施し、10分以内に安全に避難できるようにする。	A ・風水害、火災、不審者と、それぞれの危機管理体制について計画を立て、全職員で検討し、組織的に対応する訓練を実施することが出来た。 ・児童は静かに且つ素早く避難する訓練を行うことが出来た。	教頭 岩本○ 西村○	・危機管理マニュアルを再点検し、実効ある内容のものに常に更新していく。 ・危機管理における職員の組織体制について十分な共通理解を図り、各職員が役割を十分理解した上で即効性ある連携が出来るよう、避難訓練をはじめとして、年間を通じて訓練を継続して行う。 ・様々な状況に応じた避難経路について、検証を行っていく。	◎基本的な役割分担はできていた。また、不審者の侵入時刻や場所を設定し、実践的な避難訓練ができた。 ▲体育館・プールの新設などに伴い、校内の状況が変わっている中で、今後早急に新しい避難経路の策定や、危機管理マニュアルの再検討を行う必要がある。
	○開かれた学校づくり	地域との協働で市民性を育成 地域に信頼される学校づくり	・市民性を育む教育実践の充実を図る。 ・学校だより、学年だより、学校ホームページなどで地域ボランティア活用について情報提供を行い、認知度を90%以上とする。	B ・保護者の学校評価アンケートで、「学校は地域と協力して教育活動を行っている」では、約96%が「よくあてはまる」「ややあてはまる」と評価していた。 ・職員が学校評価アンケートで、「教育課程の中で市民性を育む教育の推進に取り組んでいるか」では、約75%が「よくあてはまる」「ややあてはまる」と評価していた。	最所○ 真崎 教頭	・各学年の教育課程において、地域と連携を図った体験活動を計画的に行う。 ・地域人材の登用によるクラブ活動の充実を図る。 ・学校だより、学級だより、学校ホームページなどで地域ボランティアの活用について情報提供を行う。	◎各学年の総合学習や生活科で、地域人材を活用する体験活動を実施できた。 ◎琴・三味線クラブ、茶道クラブ、手芸・童謡クラブ、連珠・将棋クラブなどのクラブ活動において、昨年同様継続して地域人材に協力していただくことができた。 ▲今までの取組を継続していく。 ▲クラブの地域人材の方の要望と学校で取り組める内容のバランスをどうとっていくか。
	○小中連携	成章校区三校連携による円滑な移行と 授業改善	・小中相互の授業参観や児童・職員間の交流を設定し、9年間を見通した生徒指導の充実と確かな学力の定着を図る。	A ・教諭向け学校アンケート「幼稚園、保育園(所)から小学校、小学校から中学校への円滑な連携・推進の取り組みが図られている」については、A・B評価が全体の90.9%で各部会の取り組みも年間計画通り実施された。	柴田○ 主幹 西村○ 馬渡	・中学校でのワークショップ、小学校間児童交流等の実施による交流を行い、中学校への円滑な移行を図る。また、9年間の指導内容・方法の共通理解を図り、確かな学力を育てる。	◎中学校でのワークショップ、小学校間児童交流(2回実施)、部活動体験、相互の授業参観、出前授業、3学期の生徒手帳配布等様々な取り組みを実施したことで、中学校への円滑な移行を図ることができた。 ▲中学校への円滑な移行のためには中学校が中心となって取り組みを実践する。学力向上については「生活指導」を中心に取り組む。
教育活動	●学力向上	算数科を中心とした学力向上の取り組み	・標準学力検査などのテスト結果が全国平均を上回るような「わかる授業」の工夫に努め、分析結果を指導法の工夫・改善にいかす。 ・児童・保護者を対象にした学校評価アンケートの学力向上に関する項目における評価を85%以上にする。	A ・全国・県の学力テストでは、算数科の知識・活用のいずれも全ての領域で全国平均点を上回っている。学習の理解度に関する調査では、児童は82.1%、保護者は89.4%が理解しているという評価である。	西村○ 最所	・小中連携を意識した授業の流れを取り入れ、自分の考えを持ち活用する子どもの育成をめざした授業改善に努める。 ・朝の時間の計算タイム、そろばん活用などで、集中力を育成する。	◎問題解決型の学習の流れが定着し、児童が主体的に学ぶことができた。 ◎朝の時間を活用し、基礎・基本の定着を図ることができた。 ▲算数科の成果を他教科にも生かし、さらに思考力の向上を目指す。
	○指導方法改善 (少人数・TT)	習熟度別・課題選択学習の充実	・全学年において習熟度や学習適正に応じた少人数授業やTTを行い、個人差に対応するとともに学力の定着を図る。	A ・1年生から6年生までの全ての学年で、単元の総括テストの結果が全国平均並または上回っており、92パーセントの児童が少人数・TTによる授業は「分かる」と回答している。	西村○ 柴田 最所	・個に応じたきめ細かな指導により、基礎・基本が確実な定着を図る。 ・積極的な授業公開を行い、少人数授業やTTのよさを保護者に伝える。	◎少人数授業やTTを行うことにより、基礎・基本の確実な定着を図ったり、つまずきに適切に対応したことができた。 ◎授業参観では、個人差に応じた少人数授業やTTの公開を積極的にに行った。
	○家庭学習	家庭学習の定着	・学年に応じた家庭学習の内容や方法、時間などを学校全体で共通理解し、家庭と連携して学習への習慣づけを行う。	A ・学校評価アンケート(保護者)で、「子どもは基本的な学習習慣や生活習慣を身に付けている」では、約82%が「よくあてはまる」「ややあてはまる」と評価していた。 ・学校評価アンケート(児童)で、「家庭での勉強時間はどうでしたか」では、約84%が「よくあてはまる」「ややあてはまる」と評価していた。	最所○ 西村○ 主幹 馬渡	・小中連携による「家庭学習の心得」を配布し、活用を保護者に呼びかけ、学習習慣の定着を図る。	◎「家庭学習の心得」を配布したり、「家庭学習がんばり表」を実施したりしたこと、家庭学習に対する子どもと保護者の意識を高めることができた。 ◎担任が家庭学習の実態を把握することができたので、家庭学習の指導に役立った。 ▲学年の系統性を考えた「自主学習リスト(メニュー)」を作成する。 ▲「家庭学習がんばり表」を学期に一回位実施する。
	●心の教育	道徳の時間の充実 ふれあい道徳の実施 人権・同和教育の実施	・「ふれあい道徳」において、子供、保護者、地域の方とともに、命について考える時間を作り、認知度を高める。 ・人権・同和教育授業実践や人権週間の取り組みを通して、児童の人権感覚を高める。	B ・「ふれあい道徳」の実施、盲学校との交流、人権週間、平和学習の取り組みを通じ、計画的に児童の心の教育に取り組むことができた。学校点検アンケートでA・B評価がどの学年も90%を達成できている。	稲富○ 川崎	・全学級が「生命尊重を題材にした学習」に取り組む。 ・各学年で人権・同和教育授業実践を行い、実践交流を行なう。	◎各学級で道徳の授業、人権・同和教育の実践に積極的に取り組み、自他を大切に、いじめを許さない集団作りができてきた。 ▲今後も全校的な取り組みを続け、取り組みの様子や子どもの成長を地域や保護者に発信し、学校評価アンケート40%を向上させていく必要がある。
	○生徒指導	共通理解・協働の生徒指導体制 あいさつ運動の推進 交通安全の推進	・学校マニフェスト実現の意識を全校に広げ、全職員、全児童の取り組みで、生活習慣の改善を図る。 ・挨拶の意義を理解させ、「挨拶運動」の推進を図る。 ・交通量の極めて多い校区であることを自覚し、「交通死亡事故0」を目指す。特に自転車による事故、飛び出しによる事故がないよう、重点的に指導する。	B ・教諭向け学校アンケート「子どもの基本的な生活習慣の定着のために共通理解が図られている」については、A・B評価が全体の84.8%で15.2%がC評定となっている。	柴田○ 坂井 林田 中島	・学校マニフェストにそった、月ごとの「生活のめあて」を設定する。生徒指導協議会の前に、各学年グループの話し合いの時間を充実させ、全職員の共通理解、協働の体制で生徒指導に取り組む。 ・各委員会活動に、マニフェスト実現のための取り組みを入れる。 ・あいさつカードを配布し、よくできた児童を賞賛、激励しあいさつの輪を地域に広げる。 ・交通安全教室での実践的練習。安全マップの家庭配布により家庭との連携強化を図る。	◎月ごとのめあてについては生徒指導協議会の前に、各学年グループの話し合いの時間を設置したためある程度全職員の共通理解、協働の体制が組まれた。 ◎計画委員会が中心で「挨拶運動」の推進が図れた。(あいさつカードの配布、しおりで賞賛、校内放送等) ▲連絡会の「生徒指導について」は報告のみで、具体的な取り組みを協議する時間が取れなかったため、早急に対応が必要な事案については時間を取って協議したい。 ▲今年度は校長の掲げる10のマニフェストにそって月目標を設置したが、来年度は変更が必要。しかし、どの項目も生活上極めて重要で基本的なものばかりなので大幅に変える必要はない。

○総合的な学習の時間	体験的な活動を取り入れた総合的な学習の時間の充実	・地域の人材、施設、自然環境を積極的に活用し、体験的な活動の幅を広げる。 ・体験活動についてのねらいや成果に関する情報を、家庭や地域等へ積極的に発信し、学校外の支援体制の構築を図る。 ・5年生においては、キャリア教育を視野に入れた、キッズマートを実施する。	A	・保護者アンケート「学校は地域と協力して教育活動を行っている」では、約96.3%がA・B評価をしており、職員アンケートの「家庭地域と連携し、計画的に体験活動を取り入れながら、市民性を育む教育の推進に取り組んでいる」では、約98.3%がA・B評価をしていた。	手塚○ 最所 田平	・児童の実態・地域の実態に応じて題材を設定し、自然体験、職業体験、環境体験、ボランティア体験等を学習の流れに計画的に取り入れる。 ・地域ボランティア等の専門的な知識・技能を生かした体験活動を充実させる。 ・家庭や地域への情報発信の場として、参観日の学習発表、学年・学級通信、校内掲示板等を利用する。 ・キッズマートを行うことで、一連の企業（販売）活動を充実させ、地域への情報発信を行う。	◎地域ボランティアの方々を登用し、各学年の発達段階に応じた総合的な学習の内容を実践することができた。 ◎参観日の学習発表が家庭や地域への情報発信の場なり、今年度は、校内掲示板も大いに利用できた。 ▲授業時間削減にともない、計画的な実施とさらなる内容の精選が必要である。
○読書指導	学校図書館の活性化と個人読書量の増加	・全学年で「朝の読書」に努め、年間貸し出し冊数高学年42冊、中学年63冊、低学年84冊以上を目標とする。 ・授業における図書資料の活用を推進する。	B	・保護者の理解度は71.6%で、学校だよりや学年・学級通信を通して周知通達をした結果、昨年よりも理解されている。貸し出し数を平均すると、高学年93冊、中学年97冊、低学年140冊であるが、個々の児童を見ると86%の児童しか目標達成に至っていない。 ・授業における図書資料の活用はどの学年もあり、教科も多岐にわたっている。	西○ 最所 池野 渡瀬	・朝の読書の励行や年2回の読書週間の実施により、児童の図書館利用冊数を増やす。 ・読み語りボランティアの活用により、読書に親しむ態度を育てる。 ・授業で使う図書資料を集めるシステムの活用を広め、図書資料の活用を推進する。	◎「おすすめ60冊」や図書館祭りの工夫により、図書館に親しみ、よく利用することができた。 ◎読み語りのボランティアの活用や朝の読書の継続で読書に親しむことができた。 ▲個人目標の達成を推し進めるために、月ごとの読書量の通知をしていき意欲を喚起していきたい。
●健康・体づくり	食教育の充実	・学校栄養職員・養護教諭とのTTIによる食と健康の授業を全学級実践し、児童の食に関する意識を高める。 ・元氣もりもり週間を実施し、食生活改善の推進と、望ましい食習慣の定着を図る。	A	・保護者・児童アンケートでは、A・B評価が90%を上回り、職員アンケートではA・B評価が100%だった。しかし、TTIによる授業の全学級実施は達成できなかったため。	手塚○ 大坪 今泉	・食と健康に関する授業を計画的に行い、年1回以上、学校栄養職員・養護教諭の専門的知識を生かしたTTの授業を行う。 ・元氣もりもり週間では、具体的目標を設定したカードを用いて取り組みせ、給食だより等を通して保護者への啓発活動も行う。	◎学期ごとに元氣もりもり週間を実施し、給食だよりや学級だよりで家庭に呼びかけたことで、家庭の協力を得ながら取り組むことができた。朝ご飯を食べる児童や、朝ご飯に野菜を意識して食べる児童の割合は少しずつ増えている。 ▲食と健康に関するTTの授業の全学級実施を目指す。
○幼・保・小連携	基本的な生活習慣の定着	・年3回の幼・保・小連携会議を開催し、挨拶の仕方や言葉遣い、正しい椅子の座り方、話の聞き方等について共通理解を図る。	B	・年3回の幼・保・小連携会議をもち、共通理解を図ることができた。保護者アンケート(1年)「子どもは基本的な学習習慣や生活習慣を身につけている」でも、AやBの評価が87.8パーセントとなっている。	主幹 川崎○	・気になることがあれば、保育園や幼稚園との連絡を取り、指導方針を話し合う。 ・幼・保・小の接続期の教育の円滑な移行のため、相互の参観を実施する。	◎保育園や幼稚園と連絡を取り合うことで、基本的な生活習慣の定着のための指導や児童や保護者へのよりよい対応ができた。新1年生についても、保育園・幼稚園の話をも具体的に聞くことができ、円滑な移行への助けとなっている。
○教育相談・特別支援教育	グループローラー会議の推進	・特別支援教育コーディネーターを中心に、教育相談と特別支援教育を融合させた個別の支援体制を強化する。	B	・毎月、グループローラー会議を行い、気になる児童に担任だけでなく全職員で関わることにし、効果的な手立てを探った。その結果、良い方向に向かう児童が多かった。	主幹 田平○ 堤 大塚 馬渡	・全職員による支援体制を組織し、共通理解が図られるようにする。担任が抱え込まないよう専門家チームを活用し、効果的な支援を行う。	◎気になる児童について全職員で共通理解を行ったことにより、職員間で一貫性を持って指導を行うことができた。 ◎気になる児童の情報交換を行うことで、担任が「悩みを表出したり、指導の手立てを話し合ったりすることで、担任の負担軽減の一助となった。 ▲専門家チームの有効活用を図る。
●小学校低学年の学習環境改善充実	個別指導による基礎・基本の定着 基本的な生活習慣と学習習慣の定着	・生活面の指導については、特別支援教育の重要性を踏まえ、担任を中心として全職員による指導体制の充実を図る。 ・学習面については、一人ひとりにきめ細かい支援を行い、確実な学力の定着を目指すとともに、話を最後まで聴ける児童を目指す。	B	・各担任が連絡や情報交換を密にし、個別に細かい手立てを立てて、連携しながら指導を進めてきた。 ・89.4%の保護者が子どもは授業を理解していると答え、81.8%が生活習慣と学習習慣の定着ができていると感じている。	岩本 西○ 西村 き 最所	グループローラー会議や縦割り班での指導など複数の職員による指導と情報の共有を図る。また、家庭との連携を図りながら、家庭学習の習慣化を進め、学習習慣に関することは、低学年部で共通理解を深めた上で一斉に行い、指導の徹底を図る。	◎担任だけでなく複数の教員と連携しながら指導にあたったため、学校生活のきまりの理解を促すことができ、一貫した指導体制ができていた。学年で共通理解をした上で、家庭学習の習慣化に努めたことから、30分の家庭学習の習慣化が図れ、家庭への理解や協力が得られている。 ◎主に算数科において、複数の教員による指導体制をとったことで、学習内容の定着が図れた。



6 総合評価	<p>○今年度は、「神野小学校マニフェスト」及び「神野小学校教職員七つの誓い」を内外に明確に示し、学校経営方針の目標達成に向けて、評価育成システムの目標及び方策の中に、職員各自が受け持つ校務分掌と学校経営方針目標との関連を意識した目標作成を行ったことで、各職員が今年度の重点目標をしっかりと意識し、その実現に向けて、計画的かつ積極的に取り組むことができた。</p> <p>○各学級においては、学校の経営方針、取り組みを具現化した方策を学級経営案として作成し、保護者に知らせた。また、2学期末に学級経営案についての取り組み状況を中間報告として、学級の様子、学習状況、取り組み状況について知らせるとともに、課題も明確にし、今後の方針等を保護者に知らせ、家庭と連携を積極的に進め、取り組むことができた。</p> <p>○幼保と1年生との接続期の連携の推進として、年3回の連携会議を実施し、「わくわく」「えがお」の実施状況や幼児・児童の現況を話し合うなどして幼保と小、また各園の共通認識を図り連携を深めることができた。また、夏季休業中に、職員が幼稚園・保育園の保育参観をし、園児の理解、保育の進め方など研修を行い、理解を深めることができた。さらに、今年度は、3年生と6年生が幼稚園・保育園に出向くなどして幼児との直接交流会を行い、1年生だけでなく学校全体として幼保小の連携がより深まった。</p> <p>○小・中の連携においては、小中9年間の学びの連続性を図ることを目的に、相互の授業公開や研究協議会、小中合同ワークショップや小小交流などの人的交流などに積極的に取り組み、「指導改善」と「円滑な移行」に向けた取り組みの充実を図ることができた。</p> <p>○地域諸団体と連携を図り、学習に参加してもらうなど、地域人材の導入拡大が図れた。特に、今年度は、創立130周年・体育館落成記念事業を行ったが、地域の方々、各種団体、PTAとのより一層の連携及び協働体制が強まった。</p> <p>○保護者向け及び児童向けのアンケートでは、1項目をのぞく全ての項目で昨年度を上回る、または昨年度と同ポイントという結果であり、保護者や児童の学校に対する高い信頼が定着したと考える。</p>
--------	---



7 来年度の改善策	<p>○学校経営方針の周知については、家庭、地域とも高い評価を得たが、これは、学校だよりやホームページ等でお知らせに負うところが大きく、各担任から学年・学級だより等で保護者に周知する機会が不足していた。このため、来年度は、教職員全員が学校経営方針や重点目標を自分のものとしてとらえ、各担任レベルでの周知をより積極的に行う。</p> <p>○学力向上については、今年度取り組んだ算数科における児童の「考える力」「表現力」の育成を継続するとともに、「言語化」と「活用」を促すためのノート指導のあり方と見通しの持たせ方を重点項目とし、さらに、朝の時間における基礎基本の反復練習と活用力の育成を図る。</p>
-----------	--

●は共通評価項目、○は独自評価項目